

「善因善果」

山形商工会議所工業副部長

伊藤 明彦



中学2年の秋に父を亡くしました。14歳の時です。父は戦地から復員後、「日本が立ち直るには工業を興すことで、それには機械部品が必ず必要になる」と八日町の自宅でハッピーマシン(現ハッピー工業)のマシン部品をつくり始めました。元々祖父が活版印刷を手掛けておりましたが、山形商業高校卒の父は機械製造にはまったくの素人で今日の言葉で言えば「起業家」ということでしょう。1947(昭和22)年のことでした。

戦後のめざましい復興、高度成長と軌を一にするように事業も順調に展開。山形蔵王ライオンズクラブのチャーターメンバーとして創設に参画するなど、これからという矢先の死。無理がたたったのでしょうか。幸いなことに社員全員が辞めず、仕事仲間が役員になってくれ、後継社長となった母和子を盛り立ててくれました。

早稲田大学の理工学部を卒業後、私は3年間、埼玉県与野市にある自動車部品メーカーに就職し製造現場、生産管理を学んだのち26歳で帰郷し家業に就きました。戻って2年目の時のことでした。製造部品のすべてを納入している専門商社か

ら資本参加の話が持ち掛けられました。断れば仕事がまったくなくなります。一方で会社の将来のことを考えれば自由に発想し、自由にモノをつくるのが難しくなります。母の片腕として会社を支えてくれた幹部社員は資本参加受け入れを主張し準備を進めていました。悩みに悩んだ末、「お断りする」と決断し、父と無二の親友だった方を訪れて伝えました。自分の決断が間違っていないかどうか、確認したかったのです。

その時言われた言葉は忘れられません。「仕事を干されることも覚悟の上で出した考えだろう。それでいい。だが相手には誠心誠意(自分の方針を)説明しろ。それと資本参加に動いていた社員を大切にしろ。彼らの力があってこそ会社が成り立ってきたのだから」。父とは事業のことを話す機会もありませんでした。しかし、父が遺してくれた財産はこうした形で陰に陽に私を支えてくれました。正直、断った相手にはかなり厳しい態度で臨まれましたが、自動車、半導体、産業建設機械、繊維関連と受注先を拡大する転機となりました。

山形県の製造業について少しく記載します。吉村知事は1期目、農業に力点を置いていました。確かに農業は知事の表現を借りれば「基盤産業」です。しかし、出荷額、法人税、雇用等々圧倒的に製造業が山形県を支えています。すそ野の広い「基幹産業」です。2期目に当たって知事が産業振興、中小企業支援を強く打ち出されたことは大いに歓迎するところです。

リーマンショックでは、わが社も苦境に立たされました。そして東日本大震災、タイ洪水。ようやく立ち直りかけたところに欧州財政危機、慢性化している円高、尖閣をめぐる中国との関係悪化。受注先は海外にシフトし、本県のようなサプライヤー(部品製造)はその影響をまともに受けてしまいます。取りも直さず本県の経済、雇用を直撃します。製造業の衰退は建設、卸・商業にも波及します。私たちの取引先は県外、海外が主ですが、工業製品製造を通じて本県の発展と雇用確保に貢献していると自負しています。会議所の一員としてモノづくりに対するよりいっそうの支援を行政に強く求めていく決意です。

私事になりますが、長年会社経営に携わってきた母が3月に亡くなりました。生前は商工会議所女性会に入会し、高島しづ枝会長はじめ多くの方々から励ましを受けました。ありがとうございました。『善因善果』という言葉があります。これまで受けた恩恵を少しでもお返しできるよう『善因』を積みたいと思っています。

(株)伊藤製作所代表取締役社長